

研究論文

社会思想としてのオリンピック論：  
競技者の逸脱にみるオリンピックの規範的分析から<sup>1</sup>

佐 藤 洋（総合スポーツ科学研究センター）<sup>2</sup>

Abstract

The influence of the Olympic Games is pervasive in today's society. The Olympic Movement promotes Olympism around the globe. Through the performance and deeds of Olympic athletes, the Games claim to impress and give hope to people around the world. However, an assessment of the reality of the Olympic Games reveals a variety of poorly-regulated tournament conditions which neither allow the athletes to compete fairly, nor encourage them to comply with fixed norms. Deconstructing the phenomenon of the Olympic Games as a social theory is a necessary step in reconsideration of the Olympic ideal.

Accordingly, the present study set out to investigate desirable approaches for the prevention of athlete deviance, focusing on Olympism as a social theory with a normative perspective.

Our study methodology involved dividing athletes into two categories for analysis, based on their relationship with the Olympic Games. We considered the deviance manifested by athletes from a standpoint aligned with the norms of the Games. Further, we considered how the Olympic Games, as a social theory, based on the founding principles of Olympism, drives the athletes of today into deviance from the standpoint of the Games as a source of norms.

We concluded the study by making recommendations for prevention of deviance from norms in athletes and for consideration of normative Olympic Games as a social theory. The desire to avoid deviance from Olympism, the norms of the Olympic Games, is a virtue present in the athletes. Such athletes can be seen as the embodiment of an identity established in conformance with Olympism. Athletes play the leading roles in the tournament, and they should be the focus of renewed emphasis in the social theory of the Olympic Games. These recommendations form the basis for an ideal of norms based on Olympism, aiming for Olympic Games that inspire and move people around the world.

---

<sup>1</sup> The Olympic Games as Social thought : Normative Analysis of the Games with a Focus on Athlete Deviance

<sup>2</sup> Sato Yo

## 抄録

オリンピックはいまや社会の中へ溶け込み、オリンピック・ムーブメントが推進されている。オリンピック・ムーブメントとはオリンピズムを世界中へ推進することである。例えば競技者のパフォーマンスや行動を通じて、世界の人々に感動や希望を与えることを謳っている。しかし、オリンピックの現実をみると、競技者が一定の規範に則り且つ正々堂々と競争できないような、ある種杜撰な大会実情がある。ともすれば、オリンピックの在り方を再検討するため、社会思想としてのその姿を明確に打ち出していくが必要になる。

そこで本研究の目的は、オリンピズムにみる社会思想としてのオリンピックが競技者を逸脱させないために、規範的観点から如何にあるべきかを考察することである。

本研究の方法は、競技者とオリンピックにかかる関係を2つのカテゴリーに分けて分析を進める。一方は、オリンピックの規範に同調するという立場から、競技者が陥る逸脱について論じる。他方では、規範そのものを提供する側であるオリンピックの立場から、オリンピズムを基に開催される社会思想としてのオリンピックが、実際のところ競技者を逸脱させているという観点から論じる。

本研究の結論は、規範から逸脱しない競技者を守り、且つ社会思想として規範的なオリンピックを考えるための提言とした。競技者にはオリンピックの規範すなわちオリンピズムから逸脱しないような、徳としての存在がある。こうした競技者は、オリンピズムに則ったアイデンティティを確立した存在といえる。社会思想としてのオリンピックは、いま一度大会の主役である競技者に重きを置くべきである。このような提言は、オリンピックが世界中の人々に感動や希望を与えるための、オリンピズムに基づく規範としての在り方の根拠となる。

Keywords: athlete, Olympic Games, Olympism, deviance, norm

キーワード：競技者，オリンピック，オリンピズム，逸脱，規範

## 1. 問題の所在

### 1.1 社会思想としてのオリンピック

わが国では、2020年に開催される東京オリンピック競技大会の成功を多くの関係者が願い、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント<sup>1)</sup>が推進されている。これはオリンピックの理念とされるオリンピズム<sup>2)</sup>に関係する。オリンピズムとは、クーベルタンがオリンピックに込めた願いである。クーベルタンの亡き後世に生きる体育・スポーツの関係者たちは、その願いをオリンピックの理念や精神と考え、ひいては体育・スポーツ界におけるひとつの理想的な社会思想として捉えて

きた<sup>3)</sup>。

こうした現状を支えるオリンピックの理念や精神は、ひとつに地球という規模における集合体として捉える、いわば世界市民としてのコスモポリタニズム的な思想によって支持されることがある。例えば「エケケイリア（休戦調停）」は、古代ギリシアにおけるオリンピックが神に捧げる競技祭であったからこそ、人々が戦争や紛争を止める一因となりえた。このエケケイリアにみる規範的な意識こそ、現代のオリンピック競技大会（以下オリンピック）においても期待されているものである。現代のオリンピックに準えていえば、古代のそれと同様に、何かしらの規範的意識——す

なわちオリンピズム——のもと、スポーツを通じた理想に導かれることを謳っているものであり、現在に生きる人々が国境や人種を超え、世界市民として平和を希うような意識涵養が期待されているといえるだろう<sup>4)</sup>。

このような意味において、社会思想としてのオリンピックは、我々をその理想たる理念や規範のもとに導く、いわば社会的機能をもつものとしての側面<sup>5)</sup>が期待されている。ただし、このような考えは、あくまで理念的・理想的な考え方であるのかもしれない。

オリンピックに関する研究では、いくら崇高な理念や精神があろうとも、様々な問題を抱えていることが指摘されている<sup>6)</sup>。少なくとも、オリンピックに関しては、政治的利用の問題や開催都市にかかる莫大な資金の問題<sup>7)</sup>、さらには競技者におけるドーピング問題<sup>8)</sup>などが起きてきたし、2016年に開催されたりオ・オリンピックだけをみても、大小様々な問題が起きている。このような現状をみるならば、我々はいま、現実に行き詰っている問題に焦点を当て、議論を始めることが必要なのではないか。そして、このような問題群が指摘されてきたオリンピックであるが、実際のところ、その問題の矛先は競技者に向いている事実があるのではないか。もしそうであるならば、丹羽が去る1980年代においてすでに指摘しているが、スポーツやかかる競技者が「政治、経済、教育、宗教などの現実と密接に関係しながら、それらの手段としてさえ利用されている」<sup>9)</sup>という現実に疑問を呈したい。また、マンデル (J. D. Mandle) らが述べるように、「スポーツは文字通りの意味で一つの文化的形式なのであり、広い意味の政治の中で道具的な価値をもつものでない」<sup>10)</sup>のであるから、当然ながら競技者は、単にオリンピックに利用される資源や道具などではないはずである。

そこで本研究における問いは、オリンピズムという規範に基づくオリンピックに参加する競技者という存在があると考えるとき<sup>11)</sup>、実際のオリンピックは無下に扱っている現実があるのではない

かということである。本研究では、社会思想としてのオリンピックを問い、オリンピックの現実を是正するような提言を試みたい。

## 1.2 リオ五輪にみるオリンピック問題

確かにオリンピックにおけるオリンピズムは、恒久的で普遍的な活動の精神として考えられている。そしてオリンピズムはオリンピックに通底する理念であり、常にオリンピックを規範的に在らしめようとするひとつの思想である。しかし、先に指摘された現実的な問題に立ち返り、オリンピックの現実をみるならば、その理念や理想からかけ離れた現場で競技者が競い合っている事実を確認することができる。すなわち、競技者にとってのオリンピックは、どのような競技大会だったのか。

ここでは2016年にブラジルで開催されたりオ・オリンピックに焦点を当て、実際に起きた二つの問題から競技者への影響およびその扱われ方を分析しよう。

一つ目は、人気競技の放映時間を政治的権力のある自国の国民に当てようとする放映権の問題である。この問題から考えられる競技者への影響は、少なくとも通常では開催されない時間に競技が開催されることで、コンディション調整が難しくなる。真夏の南米で開催するという条件を考えれば、比較的涼しい時間に競技を実施することは妥当であると考えられるが、それでも競技者が互いにブラジルに会して競い合うということよりも、オリンピックにかかる政治的事情によって競技者に影響が及ぶのであれば、それは不条理なことである。

二つ目は、ボートやプールの会場にみられた、競技環境の整備不足の問題である。これは水球競技や飛び込み競技の会場において実際に水質調査まで行われた現状からもわかるように、競技者のオリンピックにおける快適な競技環境が整備されていない。競技者からは「目が痛い」、「臭い」などの声もあがった。例えば気象条件によって快適な競技環境が整わないのであれば致し方ないと考

えられるが、大会運営という人為的なところに原因があるならば、これもまた不条理なことである。

こうしたオリンピックの問題を考えたとき、果たしてオリンピックはオリンピズムに基づいた競技大会を開催していると考えられるのだろうか。オリンピズムは、競技者が競い合う場面からスポーツにおける感動を提供することや、世界や社会の国際相互理解を促すという側面を持ち合わせているのである。しかし、オリンピックそのものが競技者に提供しているものは、競技者が正々堂々と競争できないような、杜撰な競技大会の実情とみることができる。競技者がオリンピックやスポーツにおける規範を守り且つ逸脱しないように行為するならば、オリンピックという競技大会は、競技への問題を提供することなく、また規範としてのオリンピックという競技大会を提供する責任があるのではないだろうか。翻って、競技者をオリンピズムの理念や精神から疎外してしまうようなオリンピックとなっていないだろうか。

### 1.3 競技者とオリンピックの狭間にみる問題点

本研究では、競技者とオリンピズムに則って開催されているはずのオリンピックに着目することから始めよう。この着眼点には、社会学における分析枠組みを援用する。すると、競技者とオリンピックはそれぞれ次のように捉えることができる。競技者は、人間の為す社会現象として考えることができる。それは、競技スポーツにおける不断の努力に勤しむような競技者が現代社会の構成員として存在しているということであって、また、スポーツ界という社会が現代社会において実際にあるという事実に基づく立場である<sup>12)</sup>。競技者の議論は本論にて詳述するが、少なくともオリンピックは、先に不条理として指摘したような問題が潜んでいることを確認した。しかしそれは、その因果が政治的な側面にあったとしても、単なる準備不足という側面にあったとしても、人為的によって引き起こされたものに変わりはない。こうした社会におけるオリンピックの問題というもの

は、結局のところ、先と同様に人間の為したものの結果としてみることができる。この分析の枠組みを整理してみると、競技者とオリンピックを二様の観点に区別することができるだろう。このように考えるならば、二様の狭間にある相互作用の関係を読み解いていくことで、オリンピックにかかる人間と社会を読み解くことができるのではないだろうか<sup>13)</sup>。では、本研究を遂行するにあたって先行研究を確認する。

本研究では、競技者とオリンピックの関係を論じるにあたり、コークリー（Coakley）の社会理論として述べられる検討方法を援用する。コークリーは、社会学者としての立場と社会という用語の定義をそれぞれ次のように述べる。

社会学者は、社会的世界（social world）にある諸力と資源を彼らがどのように使っているのかを明らかにするのである<sup>14)</sup>。

社会という用語は、他の集合体から自らを区別する共有された自己同一性の感覚と政治システムによって結び付けられ、ある特定の地理的範域に住居する人びとの集合体を指している<sup>15)</sup>。

また、コークリーは「相互作用論」<sup>16)</sup>、「批判理論」<sup>17)</sup>、「機能主義論」<sup>18)</sup>の関係性、そして「規範」<sup>19)</sup>や「逸脱」<sup>20)</sup>ら概念との関係を次のように述べる。

相互作用論と批判理論に基づくスポーツ社会学を志向してきた私たちにとって、「逸脱」という社会的用語は大きな問題を提起する。「規範」と「逸脱」という用語は機能主義論から導き出されたものであり、「ノーマル」とか「逸脱」について、社会の中に一定のコンセンサスがあることを前提にしている。しかし、それを判断する基準を誰が決めているのかと考えると、批判理論のテーマになってくる<sup>21)</sup>。



ここでは上記コークリーの議論を援用して、社会現象としてのオリンピックに照らし合わせながら人間と社会の相互関係について述べたい。コークリーは社会の中に一定の合意——つまりオリンピックそのものへの合意——がない場合、または社会におけるその判断基準が明確ではない場合、それは批判理論の議論になると指摘する。しかし、オリンピックには明確に、オリンピズムという思想が存在している。オリンピズムとは、オリンピック憲章に基づいて解釈されるものである。そこではオリンピックの開催にあたり、都市や参加者がオリンピズムに合意のもとでオリンピックが開催されるとある。つまり、この現実世界において、オリンピックが開催されているという事実を確認するならば、オリンピックに関わる人々は、皆ある種無条件的にオリンピズムに同意していると言わざるを得ない。もしそうでなくては、オリンピックがオリンピズムに則って開催されているという関係性が疑がわしい<sup>22)</sup>。

したがって、オリンピックが実際に開催されているという事実に基づくならば、我々の判断基準は「オリンピックはオリンピズムに則っているか」という形式ですでに存在している。このような立場から考えれば、オリンピズムという普遍的な理念に基づき、オリンピックが開催されているということは自然である。オリンピックについては、一般社会の中で一定の合意を得ているという前提がある限り、人間と社会の相互関係を検討することが可能であるといえよう。この意味で、コークリーの議論に準えれば、批判理論を用いるのではなく、競技者とオリンピックの関係について、機能主義論に導かれる規範や逸脱の概念を用いた関係性に関する検討が有効である。また、「『逸脱』は規範を侵害することで生じる」<sup>23)</sup> という関係性も併せて留意しておきたい。

では次に、コークリーの機能主義論への見解を確認する。

機能主義論では、「逸脱」を不完全な社会化や

社会組織の矛盾の結果だとみる。つまり「逸脱」は、人びとが文化的価値や規範を学んでいない場合や、社会の構造に葛藤や緊張がある場合に発生するのである。したがって、「逸脱」を抑制するには、社会化のプロセスを改善し、社会システムの中の構造的な葛藤や緊張、矛盾を取り除くことが一番良い方法になる<sup>24)</sup>。

こうした意味で、競技者はオリンピックにおける不完全な社会化や社会組織の矛盾の結果で逸脱が起き、その逸脱の抑制のためには、オリンピックという社会システムの中の構造的な葛藤や緊張、矛盾を取り除くことが必要となってくる。もし、本研究がオリンピックへの提言だけを目的として論じるならば、社会システムの中の構造的な葛藤や緊張、矛盾を取り除くための具体案を提示すればよい。しかし、本研究ではオリンピズムに則ってオリンピックへ参加する競技者に関する問題が根源にあった。そのため、オリンピックに対する提言は、競技者の立場から議論を重ねて、オリンピックに対する提言の根拠としたい。そこで本研究では、競技者の逸脱をめぐる議論を基軸として論じる。

スポーツの世界において、逸脱を主題とするものはその原因や社会的関係に多くの関心があるが、選手社会の逸脱に関する体系的な研究は少ない<sup>25)</sup>。また逸脱する競技者を客観的にみる立場では、別点でラベリング理論<sup>26)</sup>を用いた批判的検討がなされている。しかし、本研究ではあくまで「社会思想としてのオリンピック」を論じるにあたり、オリンピックと競技者の関係を相互作用という社会的関連から紐解き、オリンピックは規範として競技者を守るべきという立場から議論を進めていきたい。

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1 研究の目的

オリンピズムにみる社会思想としてのオリ

ピックが競技者を逸脱させないために、規範的観点から如何にあるべきか考察することである。

## 2.2 研究の方法

本研究の方法は、競技者とオリンピズムに基づくオリンピックの相互関係を分析することである。そのため、それぞれの立場や社会における責任を明確にすることを踏まえて、競技者の現実問題を切り口として逸脱の観点から検討する。具体的には、スポーツ社会学におけるテキストであるコークリーの議論を使用して議論を重ねて、オリンピックへ提言する根拠を詳らかにする。

ところで本研究は、スポーツ社会学の領域から出発して議論を進めているが、必ずしも、先行研究にあるような道筋は採らない<sup>27)</sup>。そのため概念の使用に関しても、競技者がルールあるいは規範を破るといった社会学において用いられる逸脱の概念から出発するが、競技者の逸脱論を論じていくことが主題ではない。本研究では、規範としてのオリンピックが競技者を逸脱あるいは疎外させないようにするための提言を念頭に議論が進められる。これは社会思想としてのオリンピックの在るべき姿を論じるためであり、現実を是正するためにオリンピックの現実的な問題から出発したのはこのためである。

具体的には、オリンピックと競技者にかかる逸脱および規範を2つのカテゴリーに分けて議論を分析的に進める。一方のカテゴリーは、スポーツ社会学において従来から行われてきた競技者の逸脱の議論、すなわちオリンピックの規範に同調する競技者の逸脱に関する議論である。他方は、社会思想としてのオリンピックが、実は競技者を逸脱させてしまっているのではないかという、規範としての在り方を考察する議論である。

以上の検討を通して、本研究は、競技者が逸脱しないためのオリンピック論を視座として、その在り方についての規範的検討を進める。

## 3. 競技者の逸脱と規範としてのオリンピック

### 3.1 競技者の現実と逸脱

本章では、競技者がオリンピックの規範の源であるオリンピズムに同調することを踏まえ、オリンピックを目的とした競技スポーツの道りに関する逸脱について考察する。その手始めとして、まずは競技者の現実について論じている研究を概観してみたい。

まず、マンデルらに依れば、「スポーツは、正義、相互依存、共同、そして達成という重大な人生の課題が積み重なった『場』なのである」<sup>28)</sup>。こうした「場」における競技者の競技スポーツの生活は、当然ながら皆全てが良い方向に向くとは限らない。

吉田は「そもそも種々の困難は、競技者がそれ相応の目標を目指して競技生活を送っていく際には付き物とも言えよう」<sup>29)</sup>と述べる。この指摘に倣えば、オリンピックに向けた競技生活の過程では、何らかの困難に陥ることが避けられない。それは、オリンピックが競技スポーツにおける世界有数のメガイイベントであるのだから、その競技者の競技生活における困難は、他の一般的な競技大会に比してより果てしないものがあると考えてよい。こうした吉田の困難に対する見解は、競技者がオリンピックを目指した競技生活からの逸脱を説明する、重要な手がかりとなり得るだろう。

次に、オリンピックへの出場などといった、競技者が自身の目標を達成した場合はどうか。この問いに対しても吉田は、「競技者には競技生活ないしはその後において、種々の困難が不可避といっても過言ではない」<sup>30)</sup>と述べる。ここで指摘される競技者は、自身の目標を達成するために、競技スポーツの道りを選択したという事実に基づいている。その事実から、競技生活やその後も困難からは逃れにくい。そして誰しもが営むような一般的な生活に比して、競技スポーツの生活に傾倒したことに原因が疑われている。吉田の指摘に従えば、引退後も引き続き、何らかの種々の困難

が待ち構えている。ともすれば、競技者は現代社会を生きるための日常生活とは別に、競技生活という道のりに入ったからこそその困難が日常生活に加わることが予想できる。こうした競技者の困難は、如何なる問題を引き起すのか。

競技者の困難には、一般的な日常生活で起こり得るような困難とは異なる、競技スポーツ特有の困難<sup>31)</sup>がある。本研究が、競技者とオリンピックの相互関係を指摘するものであることを考えれば、例えば困難が挫折やバーンアウト問題<sup>32)</sup>の起因となっていると考える議論を避けられない。さらに、その他の競技者問題をみれば、競技者は子どもの頃の目標や願望をほとんど実現できないうちに競技スポーツの世界から退くことや、競技スポーツの世界で安定した居場所を見出そうとしても厳しい現実が待っていることが指摘されていることも確認しておきたい<sup>33)</sup>。

しかしながら、これら議論を以ってしても、またどんなに社会的な困難があろうとも、競技者がオリンピックへ標準を合わせ、まさにいま競技生活に生きている事実を否定することができない。挫折という点に限っていえば、和は高い競技レベルを有する競技者に限定して質的調査を行い、先行研究における概念的な整合性を加味して「スポーツにおける挫折から立ち直る過程とは、『自己の目標が達成できなかった際に、競技の継続について葛藤し、共同的主体性の向上によって立ち直る過程』<sup>34)</sup>と結論づけた。すなわち、挫折から立ち直ることは競技者にとって重要な課題であり、競技への葛藤を克服して立ち直る競技者が現実存在することを示している。

これに関連して、わずかな数であろうとも、実際に金メダルを獲得している競技者の存在を忘れてはならない。吉田は金メダリスト K 氏のライフヒストリー研究において、「K 氏の競技者キャリアは基本的に、スポ少・中学時代は導入・基礎期、高校時代は強化・飛躍期、大学時代は停滞期、そして実業団時代は仕上げ期と捉えられる」<sup>35)</sup>と述べる。K 氏のライフヒストリーをみると、困難

のような問題に無縁ということはなかったようであるし、少なくとも順風満帆な競技生活ではなかったことが理解できる。K 氏にみることでできるように、競技者には『『捨て切れ』なかった『オリンピック』という思いが後のオリンピック出場、金メダル獲得へとつながった』<sup>36)</sup>という競技生活が事実として残っている。こうした競技者は挫折や困難を乗り越えて成功したと考えてよいだろう。そして少なくとも、オリンピックに関する競技生活の道のりということからは、逸脱していないと考えられる。

ところで、こうした逸脱しない競技者は、その逸脱しなかったという判断基準がひとそれぞれによるのではないだろうか。端的にいってしまえば、金メダルが獲得できたから＝逸脱しない競技者という簡単な話なのではなくて、やはり、ひとによってそれが逸脱であったり、逸脱でなかったりするのではないか。それは、金メダルの獲得や、オリンピックへの出場、あるいは競技生活で自身が納得するような軌跡を歩んで来たかなどといった、ひとそれぞれの判断対象があって、その判断基準が問題となるのではないだろうか。

いま、ここで述べたいことは、一般の存在とオリンピックの関係、競技者という存在とオリンピックの関係では、社会における相互関係やそれぞれ機能する在り方が異なるという指摘である。コークリーは、「ある場所や時間において『ノーマル』な行動が、他の場所時間では『逸脱』となることがある」<sup>37)</sup>と述べる。これはひとや場所や条件によって、逸脱かどうかの判断に変化が認められるということである。生活を営む場所や環境の別もさることながら、時と場合によっても、認められる振る舞いや認められない振る舞いがあることを容易に想像することができよう。だが、実際のところ判断基準に関しては、第三者が認めたりあるいは認めなかったりするこの境界線こそが、第三者による逸脱なのかどうかの判定基準になり得ているにすぎないのではないだろうか。



### 3.2 競技者の逸脱にみる倫理的側面

先に逸脱しない競技者をおさえて、その逸脱にかかる判断について述べた。そして、第三者による判断は、結局のところそのひとの基準に委ねられているのではないかという疑問を残した。本研究における競技者は、オリンピックの規範と考えるオリンピズムに基づいて、オリンピックに向けた競技生活を営むことを想定している。すればひとまず、そのような競技者が社会学の観点から如何に着目されるか確認しておきたい。次に、このような競技者の逸脱という行為がどのように考えられるか検討する。引き続き、コークリーの議論を参照する。

近年、スポーツ関係者の「逸脱」が広く注目を集めるようになった。フィールド上でのルール違反やフィールド外での犯罪行為の報道が増え、そうした行為を抑制するのは難しいと人びとは感じている。多くの人が、スポーツは人格を形成すると信じているだけに、スポーツでの「逸脱」事件は人びとを失望させ、社会全体の道徳が低下していると思わせる。そして人びとは、金と欲が規律や自制心の欠如と結びついて、スポーツの純粋さとスポーツマンシップを壊してきたと考える<sup>38)</sup>。

はじめに、この議論は、競技者に特化した観点から述べられていないことを確認したい。つまり、競技者の行為から派生した物事が分析の対象である。しかし、これはスポーツ関係者の話であるが、競技者という存在も逆説的に含まれていると考えることが自然であろう。ともすれば、競技スポーツにおける逸脱の事例についてもまた、コークリーが述べる議論に当てはまるようにスポーツの現実を分析してみよう。コークリーは次のように述べる。

スポーツにおいてルールを破る人びとを、機能主義論のように道徳的に破綻していると言えない場合がある。選手は、スポーツにおける自分たち

の決断や行為を導く規範を自ら創り出し、それを維持しているのである。したがって、選手がプレーする実際の状況の中で、彼らの経験を検討し、「逸脱」を説明する必要がある<sup>39)</sup>。

ここでは、競技者の行為を倫理的側面から分析することにする<sup>40)</sup>。コークリーが述べる競技者の行為は、どのように結果を齎したかという構造を詳らかにするためである。例えば、競技スポーツにおける競技者の逸脱として、サッカーにおけるファールが倫理的に問われる場面を考えてみたい。

サッカーの場面を想像されたい。ストライカーはゴールキーパーまで抜いて、あとはゴールに押し込むだけの状況で、ペナルティエリア内に侵入した。そしてストライカーは、シュートすることを考えながらドリブルをしている。その時、後ろからきたディフェンダーはファールを犯して、相手チームにペナルティキックを与えた。

この場合、ディフェンダーはファールを犯したのであるが、倫理的に問われたのは、人間が犯したファールという行為である。ルール上では、ファールすることが違反であるために、倫理に反する行為すなわち逸脱として考えられる。この場面をコークリーの議論でいえば、多くの人はスポーツが人格を形成すると信じていたとしても、こうしたファールというスポーツにおける逸脱が人びとを失望させるのであるし、ひいては、競技スポーツという社会全体の道徳の低下を嘆かせる要因になるかもしれない。さらにコークリーの議論を読み進めると、こうした逸脱が起因となって、スポーツや競技スポーツの実際とは直接的に関係のないものまで関連づけられる可能性がある。こうして引き起こる問題は、一般社会に間違った情報が蔓延する可能性である。例えば、競技者がファールという行為を犯したという事実は、むしろ競技者がファールすることを当然のことであるかのごとく捉えてしまい、翻って、ファールという逸脱が原因で野蛮なスポーツ界というイメー



ジが作り上げられるのである。このように、ここまでの議論では競技者が犯したファールという行為を問うている。

しかし、その一方で、ファールという行為は競技スポーツにおけるひとつの構成要素とみることでもある。このように考えるならば、なぜ競技者がファールをしたのか、そこにどのような考えがあって行為に及んだのかなど、いくつもの条件を判然とさせる必要がある。そうした現状が明らかにならなければ、どこから逸脱であって何が逸脱とされる基準なのか揺曳を孕む。強い口調でいえば、真理を遠ざける。このような逸脱にかかる判断は、一体誰がどのようにして判断基準を規定するものだろうか。こうした状況は、様々な競技スポーツの場面で起こり得る問題である。コークリーはスミス（Smith）の議論に基づいて、次のような問題意識を述べている。

私たちは新しいアプローチとガイドラインを必要としている。スポーツの理想を過去に求めることはできない。パラリンピックにおける新しいテクノロジーが、公平さをめぐる数多くの難題を生み出しているし、新型水着が多くの記録を書き換えてしまったことは記憶に新しい。私たちは常に新しい問題に直面しており、それに対処するためには、不断に新しいアプローチを採ることになる<sup>41)</sup>。

こうした競技者の逸脱をめぐる現実を検討の課題とするならば、我々はどのように逸脱の議論を考えることができるのか。ここでは、競技者とオリンピックにかかる相互関係を、いま一度分析的に考察する必要があるだろう。

コークリーの議論を見ると、逸脱だけに頼って議論することに限界があると理解できる。このような見解に対しては、議論の転換をはかって対応してみたい。ここでは、競技者とオリンピックをそれぞれ A と O とし、それを判断しようとする第三者（判断者）を仮定する。第三者は A と O の関係を判断する立場である。すなわち、これ

までの議論では、筆者が第三者として逸脱を述べてきた立場である。しかし、上記コークリーの指摘に鑑みれば、第三者として判断するような筆者の立場は、あくまで立脚するひとつの立場から述べている逸脱の議論にすぎない。そこで、「オリンピックズムに則っているはずのオリンピックという規範の在り方」について提言するためには、コークリーによって限界の示された A と O の関係を徹底的に逸脱の観点から論じるより、逸脱と並んで提示した規範の観点に焦点を当てて論じていくことが妥当のように思われる。さらにいえば、これより A と O の関係を規範の観点に転じて議論することは、逸脱の議論のときと変わらず、機能主義論の範疇であるため議論の外郭を超過しない。よって、逸脱の観点からみてきた見地を担保しつつ、次に規範の観点から検討することは、逸脱概念を用いた議論では限界があって見えなかった競技者とオリンピックの関係性を浮き彫りにする期待がある。

スポーツ社会学の研究手法としての機能主義論なる枠組みや逸脱および規範の概念を入り口として議論を始めたが、本研究で次に論じることは、競技者がノーマルに——すなわちオリンピックズムに則ってオリンピックを目指しているという意味で——基づく場合の、オリンピックという競技大会の規範的な在り方である。

そこで次に、機能主義の立場へ立ち返り、オリンピックにおける規範と、競技者の逸脱の関係性を考察する。このように、競技者とオリンピックの相互作用関係を論じれば、先とは異なる逸脱の側面が浮き彫りになる。コークリーは、次のように述べる。

機能主義論では、不正や不平等に対する抗議行動が「逸脱」とみなされることさえある。だから私たちは、何が「逸脱」なのかを決める社会的なコンセンサスはない、というところから始めようと思う。しかし、道徳や法律に反したり、アンフェアな行動や競技者を傷つける行動を認めているわ

けではない。そうした行動をそれに関わった人々の考え方と置かれた文脈から理解する必要があるものであり、何が「ノーマル」で何が「逸脱」かという一般的な考えを受け入れる必要はないと考えている<sup>42)</sup>。

まず、この議論に倣えば、我々が逸脱だと判断するための社会的コンセンサスはない。ともすれば、競技者がオリンピックにおいて逸脱したと決めることになるような社会的コンセンサスはない。このコークリーの議論は方法論の検討と多少重なるところがあるが<sup>43)</sup>、少なくとも競技者の行為や行動をみると、それにかかる競技者の考え方と、そうした競技者の置かれている社会的位置を文脈から理解する必要があると述べる。

競技者からみるオリンピックの考察では、競技者がどうすればノーマルである、つまり逸脱でないとか、逸脱であるとか議論することが必ずしも答えを導かないことを認識する必要がある。それは、競技者やオリンピックの関係について第三者によって判断されることになるその基準が、ひとによって異なるということに基づくのである。これは、一般論的な見地をおさえて判断基準を示すことに注力するのではなく、徹底的に判断するひと自体の立場や考え方の分析を必要とするということである。

ここで本研究は、オリンピズムに基づいてオリンピックに参加する競技者や、オリンピックの規範の源であるオリンピズムに同調する競技者という存在を前提としていることに立ち返ろう。そして、競技者がオリンピックという規範へ同調する時に起こり得る逸脱を、競技者の立場や考え方の観点から検討する。

### 3.3 競技者の逸脱を超えて：規範への過剰同調

競技者は、先のスポーツ倫理の側面から展開されたような規範に同調するという形式がある。これを踏まえて本研究では、次に、競技者がオリンピックという規範へ——すなわち二様それぞれが

オリンピズムへ基づいて——同調することを念頭に、競技者の逸脱を議論したい。

コークリーによれば、競技者は規範に同調するにあたって、過剰同調しやすい。それは競技者という存在であるがゆえに、逸脱的な過剰同調は表出する。この議論の根拠は、次のコークリーの引用から確認したい。

選手は自分たちのスポーツ経験を定義し評価する基準として「逸脱的」な過剰同調を用いることが多いのである。しかも、ほとんどの選手は、スポーツ倫理の規範への過剰同調が「逸脱的」だとは思っていない。むしろ、選手としてのアイデンティティを再確認し、特別な集団のメンバーであり続け、普通の人びとの退屈で変わり映えない生活と区別するために必要なものと考えている<sup>44)</sup>。

ここでは、一般の人びとと比較して、競技者の特性が指摘されている。競技者は、逸脱的な過剰同調を必要なものとして考えている。すると、このような競技者という存在にあって、オリンピックの規範を逸脱的に過剰同調するとは一体どういうことになるのか。このような性向にある競技者に対して、ここではオリンピックが逸脱的な過剰同調を促進させてはいないか検討することを念頭に分析したい<sup>45)</sup>。

逸脱に関する競技者の立場は、規範に同調するという意味で目的である。こうした立場を逸脱の観点から考察するとき、競技者がオリンピックにおいて何らかの成功を目指していると考えられるが、逸脱の議論においては「今、スポーツにおける成功とは何かについて明確な定義がない」<sup>46)</sup>と述べられている。こうした競技者の事実を目の当たりにすると、競技者が規範から逸脱する背景には、次のような問題が指摘されている<sup>47)</sup>。

(1)記録や勝利をめぐる新たな金銭的誘惑

(2)若い競技者の人生や、アイデンティティにおけるスポーツ参加の新たな意味

(3)パフォーマンスを高める新テクノロジー

(4)イメージを重要視する新しいタイプの企業スポンサーなどに囲まれている

上記の問題は、現代の競技スポーツの世界に生きる競技者にとって、切り離すことのできない社会問題である。それは、競技者の逸脱の要因となり得るからである。そしてこの4つの問題は、現実のオリンピックを取り巻く現実として考えることができる。このように考えるのも、競技者とオリンピックには、まさにこうした社会問題が取り巻いている現実が本研究のはじめに指摘されたからある。ともすれば、競技者が逸脱する背景に潜むこれら4つの問題は、オリンピックが競技者に提供している現実そのものである。そこで本章では、競技者とオリンピックの関連性を解くことを試みる。

記録や勝利をめぐる新たな金銭的誘惑は、競技者としての本能ともいえるべき卓越への働きと、その競争的価値への対価が天秤にかけられる。それは、競技者という人間の行為と、その行為に価値を認めて報酬を与えるということに他ならない。オリンピックとの関連から考えれば、実際に日本オリンピック委員会（JOC）は競技者へ報奨金を出しているし、また記録や勝利のためにスポンサーや所属チームとの関わりが浮かび上がる。すると、一般水準を超える報酬や給料を獲得する機会が提供されるという意味で、金銭的誘惑となり得ると考えられる。こうした例は、金銭的誘惑に関する氷山の一角であると思われるが、少なくとも競技者とオリンピックは複雑に関連している。記録や勝利それ自体は、競技者にとって目指すものである。報酬や給料それ自体は、競技者にとって必要なものである。ともすれば、オリンピックが競技者へ与える影響は計り知れないものがあるから、競技者という存在と社会的に関連しているということ、そして互いにオリンピズムに同調するものであることを強く認識する必要があるだろう。

若い競技者の人生やアイデンティティにおける

スポーツ参加の新たな意味をめぐる問題は、少々難しい問題である。というのも、競技者として成功しようと失敗しようとも、競技者が若くとも老いていても、全てはスポーツという思想が社会に浸透していなければ、「競技者」という在り方や先の競技生活のような道を選びしている存在を、社会的に救うことが難しいように思われる。換言すれば、社会におけるスポーツの立場が本質的な問題である。しかしながら、現実的な問題としてみれば、若い競技者がスポーツで失敗しても人生に影響を与えることのないように、また競技者という在り方が認められるように、競技スポーツの社会は競技者を逸脱させないための機能を持つことが重要である。そして、このような社会的な機能の充実のために、オリンピックはその在り方を常に更新して、社会を変えていくような機能をもつことが望まれる。

パフォーマンスを高める新テクノロジーは、ドーピング問題や競技用具の進化などによって引き起こされる問題に代表されるだろう。それはある種、競技者のより高く、より早く、より強くという願いを達成させてくれる。しかし、競技スポーツに定められたルールがあるのだから、競技者はルールに従う義務がある。この議論の詳細は、倫理的研究に詳しいのでここでは詳述しないが、少なくとも、社会的にみて常識外れなのであれば、それは競技スポーツの社会でも一般の社会でも同様に、逸脱に値する。そのために、オリンピックは競技者にとって規範であるから、ルールという法を整備して、さらに競技活動の妨げとならない「場」を提供することに重きを置かなければならない。

イメージを重要視する新しいタイプの企業スポンサーなどに囲まれることは、競技者の生き方に影響を与えるかもしれない。これは次のようなケースが考えられる。ひとつは競技者の生き方、そのイメージが採用する企業にとって最も重要な観点であるために、競技者が生き方を変えることが難しくなると予想できる。すると競技者は、自



分の生き方や在り方への気づきに対応することができないばかりか、本心が異なるばかりに、企業の要望に合わせた競技者という生き方を演じてしまうかもしれない。これは間違いなく社会が競技者を逸脱させている。あるいは、競技者としての在り方から逸脱させている。これは、オリンピックに向けた競技生活において、競技者がスポンサー企業に採用されたいがために、社会的逸脱をアピールするような状況である。この場合では、競技者が人生を、オリンピックそのものに振り回されていると考えられる。競技スポーツの社会は、金銭のように人間を誘惑するものや、誘惑に負けるかもしれない競技者など、それぞれの考え方や生き方が連関して成り立つものであることを再確認しなければならない。

競技スポーツの社会は、人間の卓越への願いを科学が実現してきたという意味で発展してきた。しかしながら、上記したように、競技者を誘惑するような問題がある。競技スポーツの社会は、良きことも悪きことも競技者に準備しているといえるのではないか。競技スポーツの社会は悪であると主張するつもりはないが、少なくとも、競技スポーツの世界において現実的な問題が指摘されることは、競技者にとっての悪きことが提供された証左である。

### 3.4 オリンピックはなぜ規範でなければならないか

これまで競技者の逸脱論を基軸として、競技者はどのような競技生活を送るのか、競技者の逸脱はどのように考えることができるのか、競技者はどのようにしてオリンピックという規範から逸脱しないか、翻って、オリンピックが競技者を逸脱させないために重きをおくべき観点を述べてきた。そしてコークリーの議論からは、「『逸脱』は、規範を侵害することで生じる」<sup>[48]</sup>と述べることを前提に考察してきた。これは規範への過剰同調という関連から、競技者のいき過ぎた行為となることを指摘した。しかし、これまでの考察では「逸

脱しない競技者」という存在を否定しなかった。つまり、これまで議論では、オリンピズムに則ってオリンピックに参加する競技者や、オリンピックの規範の源であるオリンピズムに同調する競技者ということを前提に述べてきた。そこで最後に、本研究がなぜこのような競技者を保証し、また、オリンピックが競技者という存在を守るべきであるとする根拠を示したい。

競技者は、困難や挫折が待ち受けていようとも、競技スポーツの世界あるいは社会で生きる存在である。その競技生活では、人生における目標の大きさに比例して、その代償が大きい。しかし競技者の中には、その目標が競技スポーツ界のメガイイベントであるオリンピックであろうとも競技生活に「善さ (good)」<sup>[49]</sup>を求めて活動する存在がある。それは、「徳としての競技者」<sup>[50]</sup>といえる。つまり、競技者という存在をいわば本質的に生きているような存在である。このような競技者は、社会における立場や自身が置かれている環境などはすべて自身の中で承認している<sup>[51]</sup>。こうした意味で、オリンピックにおけるオリンピズムに基づくような存在とは、逸脱しない競技者として換言して述べることもできた。そして、こうしたオリンピズムに基づく競技者がいるならば、オリンピック自体もオリンピズムに基づくことは規範としての最低条件であるし、何よりオリンピズムに基づいたオリンピックが準備・運営される必要があるだろう。このような意味で、社会思想としてのオリンピックは、競技者に対して規範でなければならないし、また、競技者が陥りやすい先の問題群から守るために準備されなければならない。

## 4. 結論

徳としての競技者という存在を前提にすると、オリンピックは規範として在る責任があり、また、オリンピックとして滞りなく開催する責任がある。それは競技者とオリンピックが互いにオリンピズムという理念に同調しているためである。こ



のように考えると、オリンピックの在り方は、競技者が同調するオリンピズムという規範そのものに通じているのだから、競技者を逸脱させないことに重きをおくべきである。時代の趨勢は、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進しているが、結局のところ、競技者を欠いては成り立たない。また、オリンピックが競技者を無下に扱うことが世界に発信されるならば、そもそもオリンピックは未来に残っているのであるか。

逸脱しない競技者を守り、且つ社会思想として規範的なオリンピック論があることは、少なくとも競技スポーツ界が今後を見据える指針となり得る。この提言は、競技スポーツの世界のみに支持されるだけに収まらない。オリンピックとは、オリンピズムに則って開催され且つ卓越した競技者が競い合うからこそ、人々に感動やスポーツのよさを届けることができるコスモポリタニズム的な社会装置なのである。だからこそ、オリンピックは、その規範たる社会思想を保ち続けている必要がある。そしてオリンピックは、オリンピズムという点で共鳴者ともいえるべき競技者が正々堂々と競い合う競技環境を準備する必要がある。

本研究では、オリンピックにおける競技者という存在の重要性から、オリンピックへの提言を試みた。これはあくまで競技者とオリンピックの関係性から導かれる結論である<sup>52)</sup>。これから2020年の東京オリンピック競技大会を控えるわが国は、その成功を支える競技者という存在を重々認知したうえで開催する必要があるだろう。いま、様々な問題を抱えるオリンピックは、オリンピズムに則った規範を常に発信する社会装置として、競技者をより善く教導することが先決であるように思われる。

#### 注および引用・参考文献

<sup>1)</sup> 時代の趨勢は、オリンピズムのみではなく同時期に開催されるパラリンピック競技大会の精神とあわせて、オリンピック・パラリンピッ

ク・ムーブメントを世界へ推進している。井上によるとこのような歩みは、近代オリンピックの基礎が固まった第4回ロンドン大会(1908年)に本格的な発展の始まりをみることが出来る。それは前回大会(セントルイス, 1904年)より盛会で、個人参加に代って国別のエントリー方式が定着し、以後、オリンピックとナショナリズムのつながりが強まり、それがオリンピック発展の一つの要因となるとともに、スポーツを通しての国際理解・国際親善というインターナショナルな理想も強化され、オリンピックの有力な理念となったのである。井上俊(2016)スポーツの社会学——輸入スポーツと伝統スポーツをめぐる——。学際第2号, 統計研究会, p.4.

<sup>2)</sup> オリンピズムについて、舛本は「このオリンピズムという思想は、一般的に何らかの形で流布し、再生産され、1つの漠然とした意味を持ち続け、意味の変容を経ながらも今日まで伝えられてきたもの」、「クーベルタンがその時代背景とともに掲げてきた理想としてのオリンピズムから、幾星霜を経て時代とともにその意味を少しずつ変えてきていると考えられる」、「それは競技スポーツの世界だけにみられる概念の変容ではない。スポーツ界のみならず文化の再生産システムにおいても同様の形で意味を変容させながら生きながらえてきた概念である」という見解を示している。舛本直文(1998)スポーツ映像の中に見るオリンピズム：その多元的表現の解釈。体育・スポーツ哲学研究 20-1, p.32.

<sup>3)</sup> オリンピックは国際オリンピック委員会(IOC)との関わりを抜きに語れない。「IOCは『オリンピズム』という社会運動のリーダーとみなされている。この運動の主義はピエール＝ド・クーベルタンによって概略が定められ、現在ではオリンピック憲章として定められている」。ピーター・ドネリー・ブルース・キッド(2016)国際オリンピック委員会の道

徳的権威——将来への提言——. スポーツ社会学研究 14, p.16.

- 4) 野上は「クーベルタンが提唱する平和とは、オリンピックのための一時『休戦』する『平和』志向の社会を意味し、オリンピックとそれを支えた社会の平和、そしてその両者の有効な関係とに理想的な人間・社会のあるべき姿を見出していた」と述べている。野上玲子(2016) オリンピズムの平和思想に関する哲学的探求——カントの平和思想を手掛かりとして——. 体育・スポーツ哲学研究 38-2, p.136.
- 5) たとえばオリンピックに関して、有形と無形のレガシーの研究が近年盛んであるが、社会的機能を持つものを考えるならば、後者のレガシーは前者レガシーの原動力になるという意味も含めて社会的な期待がある。無形のオリンピック・レガシーについての詳細な情報は、次の論文を参考にされたい。舩本直文・本間恵子(2014)無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化. 体育・スポーツ哲学研究 36-2, pp.97-107.
- 6) オリンピックを批判的に検討する研究は数多いが、ここではオリンピックの商業化に関するIOC組織批判を展開したドネリーの主張を代表的なものとして引用したい。「今のIOCは一種の多国籍企業のような理事会とみなすこともできる。オリンピックの『ブランド』を売り、その利潤の最大化を目指す」ピーター・ドネリー・ブルース・キッド (2016) 前掲論文, p.16. その他、オリンピックにおける問題群は次の研究の冒頭に詳しい。山本教人 (2010) オリンピックメダルとメダリストのメディア言説. スポーツ社会学研究 18-1, pp.5-26.
- 7) ロイ (J. W. Roy) は、オリンピックの開催について、道徳的妥当性、スポーツにとっての妥当性、実用的 (経済的) 妥当性などの観点から論じて、「オリンピック大会はこれだけの経済的・人的資源の浪費に値するものか?」という結論を述べている。ジョン・W・ロイ

(2006) オリンピックをなぜ開催するか. スポーツ社会学研究 14, p.14.

- 8) 高井はドーピングについて、次のような見解を示す。「ドーピング問題とは基本的に『身体を所有する個人』対『スポーツを統制する組織』という枠組みの中で存在してきた。これは、一般社会にみられる薬物規制 (覚せい剤など) と同様に、『個人』対『社会統制』という図式である」。高井昌史 (2009) スポーツにおけるドーピングに関する研究社会学的考察——ランキング機能に着目して——. スポーツ社会学研究 17-2, pp.77-88.
- 9) 丹羽劭昭 (1982) スポーツと生活. 朝倉書店: 東京, p. 42.
- 10) J.D. マンデル・J.R. マンデル (1997) 現代スポーツへの新たなアプローチ. スポーツ社会学研究 5, p.51.
- 11) 一般的なオリンピズムの解釈に関して、「オリンピックの背景にある理論的なイデオロギーは、フェアプレー精神、万人のスポーツ参加、および“Citius, Altius, Fortius” (より早く、より高く、より強く) というオリンピック・モットーものとの卓越を競い合うことである」ジョン・W・ロイ (2006) 前掲論文, p.10. と述べられるような立場を確認しておきたい。本研究では以後、しばしば「オリンピズムに則る / 基づく競技者」という見解を示すが、上記の議論に依拠した競技者を述べていることを併せて確認されたい。具体的には、スポーツを通じて世界や社会に何らか貢献しようとするような競技者である。
- 12) ここで示した社会現象としての競技者の意味範囲は、その一存在者 (個人) のみならず社会において「競技者」と謂われる存在の総体を指す。端的に言えば、単数でなく複数に捉えている。こうした競技者は時として、「個人の行為を越え、いわば超個人的な合合力として個人のスポーツを支配」することになる。丹羽劭昭 (1982) 前掲書, p. 42.

- 13) スポーツ社会学の研究手法の一例として、たとえば西山は、スポーツと社会という分析枠組みを用いて、グローバル化の観点からスポーツが、分断する様々な差異を乗り越えるものであることを論じている。西山哲郎（2001）差異を乗り越えるものとしてのスポーツ——スポーツにおける文化帝国主義とグローバル文化の可能性。スポーツ社会学研究 9, pp.106-138. この枠組みに比していえば、本研究は、競技者とオリンピックという分析枠組みを用いて、逸脱や規範の観点から、競技者がオリンピックの成功のために欠くことのできない存在であることを論じていく。
- 14) J・コークリー・P・ドネリー著：前田和司・大沼義彦・村松和則共訳（2011）現代スポーツの社会学——課題と共生への道のり——，南窓社：東京，p.9.
- 15) J・コークリー・P・ドネリー（2011）同上書，p.9.
- 16) 相互作用とは、「人々が行為にやり取りを通じて互いに影響を与え、また、与えられる過程を指している」船津衛（2012）相互作用。現代社会学事典。弘文堂：東京，pp.814-815.
- 17) 批判理論とは、「既存の社会に対していかなる批判の意図を抱くことなく、その仕組みを分析・記述をもって事足りりとするような社会学理論は、世に存在すまい。（中略）内容こそ異なれ、解放への関心こそが社会の現状に対する批判的実践の一翼として自らの理論活動を位置づける点に、批判理論のアイデンティティは認められる」藤野寛（2012）批判理論。現代社会学事典。弘文堂：東京，pp.1068-1069.
- 18) 機能主義とは、「ある事象を、その事象の事象以外に対する、またはその事象自身を含む全体に対する、何らかの貢献的または逆貢献的作用によって把握する立場一般をいう」宮台真司（2012）機能主義。現代社会学事典。弘文堂：東京，p.253.
- 19) 規範は、次の7つに類型化されている、すなわち、行為の選択を導く非人称的予期、行為の評価の基準、行為の意味、倫理的な規範、文法性・合理的と倫理性、規範の共有、非明示的な規則である。大庭健（2012）規範。現代社会学事典。弘文堂：東京，pp.259-260.
- 20) 逸脱に関する先行研究は多くある。たとえば、逸脱とは小笠原が「サッカーの群衆の中には社会規範から『逸脱』した行動を取る人々がいる」と述べることに象徴される事態である。小笠原博毅（2016）イギリスのサッカー研究の系譜とカルチュラル・スタディーズ。スポーツ社会学研究 24-1, p.37. その定義は、「社会的には、既存の規範から外れた行為を逸脱という」のであって、「逸脱の本質は、その行為者の属性や行為内容それ自体にあるのではなく、それを逸脱と見なす認識活動のなかに潜んでいる」と説明される。しかしながら、「社会成員の全てがその逸脱定義に正当性を認めているわけではない」とされている。土井隆義（2012）逸脱。現代社会学事典。弘文堂：東京，p.54.
- 21) J・コークリー・P・ドネリー（2011）前掲書，p.66.
- 22) この点について、本研究ではオリンピックの開催が強制的であるとかの議論はしない。あくまで本研究の立場は、競技者の現実とオリンピックの現実にみるその関係性を問題とするのである。
- 23) J・コークリー・P・ドネリー（2011）前掲書，p.71.
- 24) J・コークリー・P・ドネリー（2011）同上書，p.69.
- 25) たとえば、コークリーは次のように述べる。「競技者社会における『逸脱』に関する体系的な研究は数少ない。メディアは『逸脱』の原因を、競技者の精神的な弱さや自制心の欠如に求めるか、報酬や勝利を過剰に意識することに求めるが、それがスポーツの文化や組織、あるいはスポーツの周辺で産み出される社会的世



界のダイナミクスと関係しているという議論がほとんど無い。競技者の『逸脱』を再検討するとき、『逸脱』が競技場内で起こったことなのか、その外で起こったことなのかを区別することは重要である。両者は異なるタイプの規範とルールに関わっており、異なる原因と結果を持っている」J・コークリー・P・ドネリー（2011）同上書、p.79.

- 26) ラベリング論とは、「逸脱の中核にあるものは、社会によって逸脱というラベルを貼られることであるとする見方。『理論』と呼ばれるが、意図的・主体的に体系的な理論として提示されたことはない」南保輔（2012）ラベリング理論。現代社会学事典。弘文堂：東京、pp.1308-1309.
- 27) その好例として、J.D. マンデル、J.R. マンデルが「現代スポーツへの新たなアプローチ」として日本スポーツ社会学会第5回大会基調講演で述べた研究の立場と対比することで浮き彫りになるだろう。J.D. マンデル、J.R. マンデルが述べる研究の立場は、「我々は、スポーツの中身を検証し、その影響と魅力の根元を探ってみたい。スポーツを堕落した活動としてみたり、また、資本主義を擁護したり、変革しようと人々を導く政治の場としてみたりするより、スポーツ自身の中に重要性と積極性をみいだすものだと考えたい（傍点筆者）」と述べた。J.D. マンデル・J.R. マンデル（1997）前掲論文、p.51. 上記の研究の立場の骨子に倣いつつ、本研究がその立場を述べるならば、「競技者はオリンピック競技大会を目指す生活の最中で多くの可能性を見つけるが、競技者自身の中に重要性と積極性を認めたうえで、そこから帰納的に社会思想としてのオリンピック論を導くこと」といえるだろう。
- 28) J.D. マンデル・J.R. マンデル（1997）同上論文、p.56.
- 29) 吉田毅（2001）競技者の困難克服の道筋に関する社会学的考察。体育学研究 46-3、p.242.

- 30) 吉田毅（2006）競技者の転身による困難克服の道筋に関する社会学的考察：元アメリカ杯挑戦艇クルーを事例として。体育学研究 51-2、p.126.
- 31) たとえば、吉田が指摘する「困難」のほか、競技者であることによる外傷、競技における慢性的な怪我、また、引退後は転職不利（セカンドキャリア）の問題など考えられよう。岡部は「勝利が過剰に期待される構造に組み込まれた競技者は、競技スポーツにおいて一元的な指向性に拘束され、結果として『重圧』を背負うことになる」と述べ、競技スポーツにおける「敗北や挫折は、競技者としてのアイデンティティの喪失にもつながりうる問題性を有している」と述べる。岡部祐介（2010）マラソン競技者・円谷幸吉の自死に関する一考察——競技スポーツおよび競技者の問題性との関連から——スポーツ教育学研究 30-1、p.21.
- 32) バーンアウトは、バーンアウト・シンドローム（burnout syndrome）のことであり、燃え尽き症候群などと呼ばれる一種の精神疾患の状態である。競技者のバーンアウトについての詳細な情報は、次の論文を参考にされたい。吉田毅（1994）スポーツ的社会論からみたバーンアウト競技者の変容過程。スポーツ社会学研究 2、pp.67-79.
- 33) プティパ・シャンペーン・チャルトラン・デニッシュ・マーフィー：田中ウルヴェ京・重野弘三郎訳（2005）スポーツ選手のためのキャリアアプランニング。大修館書店：東京、pp.136-138.
- 34) 和秀俊・遠藤慎太郎・大石和男（2011）スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直り過程：男性中高生競技者の質的研究の観点から。体育科学研究 56、p.101.
- 35) 吉田毅（2010）金メダル獲得をめぐる競技者のキャリア形成プロセス——ノルディック複合金メダリストのライフヒストリー——。ス



スポーツ社会学研究 18-1, p.56.

<sup>36)</sup> 吉田毅 (2010) 同上論文, p.56.

<sup>37)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 前掲書, pp.66-67.

<sup>38)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, p.67.

<sup>39)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, p.70.

<sup>40)</sup> ここでは道徳的な行為に対する倫理的な分析を行う。コークリーもまた、選手がスポーツ倫理の規範に過剰同調する理由を以下の3点のように述べる。「1. スポーツをプレーすることは非常にエキサイティングなので、選手は関わり続けるためなら何でもしようと思う。2. 一流競技スポーツでプレーできるかどうかは、スポーツ倫理の規範に自ら過剰同調できるかにかかわっている。コーチたちは過剰同調したものを賞賛し、チームの規範とする。3. 規範の限界を超えることは、人生にドラマや興奮を持ち込む。チームメイトのために自分の身を危険にさらし、チームメイトにも同じことを期待する『自分たちを守ろうとする心理』で選手たちを結びつけるからである」J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, p.75.

<sup>41)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, p.91.

<sup>42)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, pp.66-67.

<sup>43)</sup> ここで文脈を整理しておくとして、先は競技者を逸脱させてしまう要因について論じていたが、今は逸脱の定義に関する議論をしている。

<sup>44)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 前掲書, p.75.

<sup>45)</sup> 選手の性向については、コークリーが次のように類型化している。「1. 選手は、なによりも『試合』のために身をささげる。2. 選手は卓越性のために努力する。3. 選手はリスクと

痛みを伴うプレーを受け入れる。4. 選手は可能性の追求を妨げるものを認めない」J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, pp.73-74.

<sup>46)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, p.91.

<sup>47)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, p.91.

<sup>48)</sup> J・コークリー・P・ドネリー (2011) 同上書, p.71.

<sup>49)</sup> 善 (good) とは、「人間の内に実現される善は行為の終極目的となるものであり、それは人間の自然本能の完成である理性の現実活動が人間の生の全体において達成されていることである」。廣松 渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末本文美士編 (1998) 岩波哲学・思想事典。岩波書店：東京, pp. 949-951.

<sup>50)</sup> 徳としての競技者については以下の論文を参照。ここではよき競技者とは何かということを基軸に、競技者の実践的生について述べられている。佐藤洋 (2017) 有徳な状態からみる競技者論：アリストテレスの実践学を導き手として。博士論文 (日本体育大学), pp.122-124.

<sup>51)</sup> 徳としての競技者は、スポーツが文化や社会関係が生み出し且つ変化する場であることを「知」として蓄えている。佐藤洋 (2017) 同上論文, pp.123-124.

<sup>52)</sup> 少なくとも、オリンピックを支える関係者を始め、準備や設営に関わるひとやボランティアなど個人を競技者より低く評価するものではない。競技者がオリンピックにおいて卓越性を示したとしても、完璧な競技者として認められるべきことを主張するものではない。

(受理日：2017年8月24日)